

〈看護学科〉

基礎看護学

教授：田中 幸子	基礎看護学
教授：佐藤 紀子	基礎看護学
教授：深井喜代子	基礎看護学
教授：谷津 裕子	基礎看護学
講師：羽入千悦子	基礎看護学
講師：佐竹 澄子	基礎看護学
講師：青木 紀子	基礎看護学

教育・研究概要

I. 教育

1. 基礎看護学領域では看護学生として初めて行う臨床実習である「基礎看護学実習」において、看護職のシャドーイングと多職種連携教育の一環として、医師、薬剤師、検査技師等の医療専門職者のシャドーイングを昨年度に引き続き行った。

2. 「生活過程援助実習」では初めて受け持ち患者を持ち看護実践を行っている。受け持ち患者と初めはコミュニケーションをうまく図れず援助もうまく行えないが、実習の後半には信頼関係を築き患者のニーズをしっかりと把握して看護援助できるようになり、今後の学習において大変重要な実習となっている。

II. 研究

1. 看護の歴史の継承を促進するためのオーラルヒストリー研究の実態調査を行っており、その研究成果は、日本看護歴史学会で発表した。

2. 看護援助技術については、フィジカルアセスメント技術におけるシミュレーション教育の方法、生体反応から捉える準実験的デザインの研究として、床上排泄に適した体位の検討や安楽を促す音刺激の検討を行っている。また、状況に即して実践するには判断が必要である。その臨床判断の効果的な教育方法についてパイロットテストを実施し、日本看護科学学会で発表した。

3. 看護学生の国際的視野の育成にむけて、看護系大学における国際看護に関連した科目の現状と課題についての研究を行っている。研究成果は、TNMC&WANDS International Nursing Conference 2017 (Bangkok) で発表した。また、Global

nursing & health に関する研究動向に関する統合的文献レビューを行い、研究成果を EAFONS 2020 (Chang Mai) にて示説報告した。

「点検・評価」

1. 教育

1) 2017年度カリキュラムから名称を「基礎看護学実習」と改め、昨年同様の内容で継続して実施している。他の医療専門職へのシャドーイング実習は、昨年度と同様に看護実践への学びに加え、他の医療専門職者の役割と活動を知ること、より自らの看護職への意識が高まるとともに、多職種連携の視点を持つことにつながっていたと考えられる。

2) 看護実践能力の育成に向けて精力的に教育方法の検討を行った。特に、フィジカルアセスメント教育については研究結果からも一定程度の効果が確認できている。臨地実習での実践を見据え、確実な技術習得だけでなく、臨床状況に応じた技術の実践ができるようシミュレーション教育を取り入れた教授方法を工夫することで学生から授業評価は良い結果を得ている。今後も日常生活の援助に関連した技術の習得にむけて、よりリアリティのある教授方法の工夫し e-ラーニングを用いた学習支援などを工夫していきたい。

2. 研究

研究活動については、領域構成員がそれぞれに研究テーマをもって継続して研究を行っている。

研究業績

I. 原著論文

- 1) 伊藤厚子, 馬場 薫, 田中幸子. 病院看護職における職員間暴力・ハラスメントの実態と抑うつとの関連. 東北文化学園大看紀 2020; 9(1): 1-11.
- 2) Win MMTM, Fukai K, Nyunt HH, Hyodo Y, Linn KZ. Prevalence of peripheral neuropathy and its impact on activities of daily living in people with type 2 diabetes mellitus. Nurs Health Sci 2019; 21(4): 445-53.
- 3) Win MMTM, Fukai K, Nyunt HH, Linn KZ. Hand and foot exercises for diabetic peripheral neuropathy: a randomized controlled trial. Nurs Health Sci 2020; 22(2): 416-26.

Ⅲ. 学会発表

- 1) Yatsu H, Saeki A. (Poster) Current topics about global nursing: an integrative literature review. EA-FONS 2020 (23rd Ease Asian Forum of Nursing Scholars). Chang Mai, Jan.
- 2) 羽入千悦子, 高塚綾子. (ポスター) 2年目看護師の臨床判断力を高める支援の検討-振り返りに焦点をあてて-. 第39回日本看護科学学会学術集会. 金沢, 11月. [日看科学会講集 2019; 39回: PA5-06]
- 3) 田中幸子, 川原由佳里, 小野 桂, 川上裕子. (ポスター) 看護におけるオーラル・ヒストリー研究に関する倫理的配慮の動向. 第33回日本看護歴史学会学術集会. 東京, 8月. [第33回日本看護歴史学会学術集会講演集 2019; 70-1]
- 4) 松澤真由子, 田中幸子. (ポスター) 都内中小病院における感染対策および地域ネットワークの現状と感染対策コンプライアンスに与える要因. 第57回日本医療・病院管理学会学術総会. 新潟, 11月. [日医療病管理会誌 2019; 56(Suppl.): 279]
- 5) 野村陽子, 石橋みゆき, 小山田恭子, 池田真理, 田中幸子, 巴山玉連. (口頭) 看護基礎教育における“政策コンピテンシー”の明確化. 第39回日本看護科学学会学術集会. 金沢, 11月. [日看科学会講集 2019; 39回: O2-05]
- 6) Okabe K, Takatsuka A, Kono S, Kato S, Numakura K, Mbongndo S, Tokunaga M. (Poster) An NGO's efforts in the Central African Republic to help HIV patients support themselves through agriculture. ICA-SA 2019 (20th International Conference on Aids and STIs in Africa). Kigali, Dec.
- 7) 古都昌子, 鈴木佳代, 新井麻紀子, 佐久間和幸, 大谷則子, 鈴木真由美, 手島芳江, 菊池麻由美, 佐藤紀子. (交流セッション 35) 看護学実習における学生のリアリティに寄り添う実習指導 とらえの相違をふまえて. 日本看護学教育学会第29回学術集会. 京都, 8月.
- 8) 青木紀子. (ポスター) 排泄援助に関する看護師の援助内容と思考過程の文献レビュー. 日本看護技術学会第18回学術集会. 福井, 9月. [日看技会講抄 2019; 18回: 106]
- 9) Aoki N. (Poster) Relationship between plantar pressure and ease of applying abdominal pressure when changing the upper-body elevation angle on the bed. EAFONS 2020 (23rd Ease Asian Forum of Nursing Scholars). Chang Mai, Jan.
- 10) 深井喜代子. (Opening Lecture) 看護のエビデンスをどのように見出し, 活かすか? 第10回看護生理学研究会. 岡山, 8月. [第10回看護生理学研究会予稿集 2019; 6]

- 11) 石川涼太, 深井喜代子. (口頭) 術後痛を増強させない清拭方法の開発 仮想術後創を用いた実験的検討. 日本看護技術学会第18回学術集会. 福井, 9月. [日看技会講抄 2019; 18回: 65]
- 12) 松村千鶴, 深井喜代子. (口頭) 化繊タオルの表面の形状は清拭効果に影響を及ぼすか? 化繊タオルとガーゼタオルの比較. 日本看護技術学会第18回学術集会. 福井, 9月. [日看技会講抄 2019; 18回: 109]
- 13) 深井喜代子, 佐知 亨, 新見明子. (交流セッション 3: 痛みのケアの確立を目指して(その14)) 疼痛ケア技術を社会と共同して開発する(6). 第18回日本看護技術学会学術集会. 福井, 8月. [日本看護技術学会学術集会講演抄録集 2019; 18回: 128]
- 14) Yano H, Fukai K. (Poster) Survey of nurses' observation techniques and evaluation of light reflex. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science. Osaka, Feb.
- 15) Matsumura C, Fukai K. (Poster) Effects of bed baths using towels with different textures-comparison of synthetic and gauze towels. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science. Osaka, Feb.
- 16) Fukai K, Mengyun P, Ishikawa R. (Oral) A belly band with tiny beads reduces menstrual pain: a preliminary study. The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science. Osaka, Feb.

Ⅳ. 著 書

- 1) 佐藤紀子編著. つまづき立ち上がる看護職たち: 臨床の知を劈く看護職生涯発達学. 東京: 医学書院, 2019.
- 2) 谷津裕子. 母子(親子)相互作用 CHAPTER 1: 母性看護技術で育まれる母子(親子)相互作用. 平澤美恵子, 村上睦子監修. 写真でわかる母性看護技術アドバンス: 褥婦・新生児の観察とケア, 母乳育児を理解しよう! 新訂版. 東京: インターメディアカ, 2019. p.12-9.

Ⅴ. その他

- 1) 佐藤紀子, 北 素子, 梶井文子, 嶋澤順子, 谷津裕子. Interview: 令和時代の看護教育とは: 地域連携看護学実践研究センター (Jikei Academic Nursing Practice for the Community: JANPセンター) が目指すもの. 看護展望 2019; 44(8): 1-5.
- 2) 佐竹澄子. 【できた! につながるコアスタディ 根拠がわかればもう忘れない! コツをひも解く 脳神経看護技術】大変じゃない! 体位変換, 移動・移乗介助. Brain Nurs 2019; 35(10): 18-25.

成人看護学

教授：中村 美鈴	クリティカルケア看護学， 周手術期看護学，救急看護学
教授：佐藤 正美	がん看護学，緩和ケア
教授：永野みどり	創傷ケア，看護サービスマ ネジメント
准教授：望月 留加	がん看護学，緩和ケア，家 族看護
准教授：福田美和子	クリティカルケア看護学， 急性期看護学，周手術期看 護学
講師：室岡 陽子	周手術期看護学，リハビリ テーション看護学，創傷ケ ア
講師：明神 哲也	クリティカルケア看護学， 急性期看護学
講師：山本伊都子	クリティカルケア看護学

教育・研究概要

学部教育としては、概論および健康レベルに応じた臨床看護学の慢性期・周手術期・がん・急性期の領域について学内で教授し、慢性期および周手術期看護学実習では病院での看護実践での臨地実習をとおして、習得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては、がん看護学分野および急性・重症患者看護学分野において、各自の専門性に依拠した継続したテーマを追究した。

I. 教育

成人看護学においては、対象理解に基づいた問題解決的思考を育成するために看護過程の展開を重視した教育を展開している。成人看護学の教員全員で担当する「成人看護方法論」，「看護過程Ⅱ」では、シラバスに対応した内容を科目の主担当者を中心に、新たな事例等を作成して学生のグループワークを主とした演習を実施した。授業方法は、従来通りグループ学習を基盤としたPBLの方法を継続した。学修評価のグループメンバーの貢献度についてピア評価も引き続き実施した。学生による授業評価は概ね肯定的であったが、一部の学生から、正解や達成感を望む意見があった。

実習指導においては、年度に引き続き、急性期・慢性期の担当を偏らずに指導する体制で実習に取り組んだ。教員のオリエンテーションや担当の変更等

があるような状況でも、対応することができたのは、この急性・慢性横断的実習指導体制も一要因になったと考えられる。また臨地においては、実習指導教員と臨床実習指導者との振り返りをして、引き続き連携を深めた。看護実践能力を獲得するためには、実習経験を学生自身が意味づけ、主体的に学習することが重要である。学生は、教員が臨床の場に居て、適宜振り返りをする、記録を基に看護過程展開に対するヒントを出す、ともに実践する、安全を確保する、などの教育的介入に対して概ね肯定的に評価をしていた。これらは継続したい点であり、今後も関係者と役割分担を調整し、適切な相互作用をしながらの実習指導が期待される。

II. 研究

1. クリティカルケア看護に関する研究

1) 急性・重症患者の回復を促す看護実践モデルに関する研究

クリティカルケアに関与する専門看護師に半構成的面接法にてインタビューを用いて、回復を促す看護実践を見出し、実践モデル案を作成した。このモデルの臨床応用を検証するために、臨床看護師を対象に調査を実施し、データ回収中である。

2) クリティカルケア看護実践力サポートプログラムの開発に関する研究

クリティカルケアが展開される場で勤務する看護師に対し、看護実践力サポートプログラムを構築している。特にシミュレーションとリフレクションの組み合わせが、メタ認知を高めることに寄与することが推察され、その実証に向けたプログラム評価尺度を開発中である。さらに、現場に応用可能なモデルへ発展させるための要素の抽出も行った。

3) クリティカルケア看護における看護実践に対する困難に関する研究

クリティカルケア看護における実践に対する困難についての尺度開発をし、学術集会で発表した。今後は、アセスメント指標を作成し、クリティカルケアに携わる看護師へのサポートの在り方を探求することを目的に研究をすすめていきたい。

2. 周術期看護に関する研究

1) これまでドレーン排液の色指標は、臨床上、確立されておらず、現状では、その時々に関与する医師・看護師の経験知に基づく判断であり、その判断にはばらつきがある。そこで、未開拓であった血液成分の組成や色分析から、ドレーン排液の色指標の創出までを目的とし、その臨床応用までを目指し、研究を推進している。

3. がん患者の看護に関する研究

1) がん患者と家族に対する調剤薬局薬剤師と看護師の連携による支援モデルの開発

調剤薬局を利用するがん患者およびがん患者家族に対し、より質の高いケアおよび医療の実践へ向け、薬剤師と看護師の連携内容と方法を検討するために、薬剤師と看護師を対象として調査し、調剤薬局薬剤師と看護師との連携による支援モデルを作成する。現在は薬局薬剤師を対象としたフォーカスグループ・インタビューを終了した。その結果を学会発表するとともに、その結果をもとにがん看護専門看護師を対象としたエキスパートパネルを実施する予定である。

2) がん化学療法に伴う末梢神経障害に関する研究

多施設との共同研究として、がん化学療法に伴う末梢神経障害の支援アプリケーションの評価研究、ならびに多職種協働の包括ケアシステムモデルの開発を進めている。本年度は、多職種協働の包括ケアシステムモデルを開発するために、がん化学療法に伴う末梢試験障害を抱える患者へのかかわりや多職種連携の現状について医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士を対象としたインタビュー結果の分析を行った。

3) 子育て中のがん患者の支援に関する研究

本研究の目的は、治療を受ける子育て世代のがん患者が抱える気がかりに対するアセスメントツール、及びアプリケーションを開発し、評価指標に基づくITを活用した包括的ケアモデルの開発を行うことである。本年度も昨年度に引き続き、インターネットを活用した実態調査を行うための研究計画書の作成等を行った。

4. その他に関する研究

1) ストーマ造設術患者のQOLに関わる生活特性に関する研究

直腸がんによりストーマを造設した患者を対象に、セルフケア習得とストーマ周囲皮膚障害に関連した患者の身体的要因と社会的要因の情報を診療記録から収集し、ケアニーズの指標となるリスク要因を記述した。学会で発表した。

2) 入院時褥瘡保有患者の生活特性に関する研究

科学研究費助成金(基盤 C19K10963)を獲得した。附属4病院内の皮膚・排泄ケア認定看護師10人の協力を得て、エキスパート会議を開催し、診療記録から261名のデータを得た。持ち込み褥瘡を持つ患者のうち、(1)全体の特徴、(2)入院中に死亡する患者の特徴、(3)化学療法を受けている患者の特徴、

(4)高齢者施設から転院している患者の特徴について分析し、学会発表およびその準備をした。

3) 踵部の圧力およびずれ力の測定とドレッシング材による低減効果の検証

頭側挙上時の、踵の圧力・ずれ力を測定するとともに、ドレッシング材により圧力・ずれ力が低減されるかを目的としデータを分析した。その結果、圧力とずれ力の同時測定が可能となり、頭側挙上に伴い、両方の値は増加し維持する傾向を示した。フィルム材(A群)、低摩擦ハイドロコロイド材(B群)シリコンフォーム材(C群)の3種類のドレッシング材貼付時の皮膚表面に加わる圧力・ずれ力を3軸触覚センサーにて測定した。その結果、A材と比較して、B材とC材に圧力およびずれ力の低減効果を示した。これらの結果をふまえ学会発表するとともに、現在論文作成中である。

「点検・評価」

教育においては、成人看護学の教員全員で担当する「成人看護方法論」、「看護過程Ⅱ」について話し合いを重ねて進めた。その結果、学生への学修効果が高まった。次年度も早い時期からの企画検討し、教員間の認識の統一を行う。さらに、引き続き、授業内容の精選および授業方法、評価方法について検討が必要である。実習教育においては、附属4病院との連携や調整はスムーズであり、実習内容・方法は昨年度の評価に基づきさらに発展させることができた。継続して環境調整を行い充実した教育を継続したい。教員体制としては、講師1名が新規に着任、新しいメンバーとなり成人看護学領域全体で協力して教育や組織運営を実施した。

研究においては、新たに外部資金を獲得した教員もおり、それぞれが積極的に取り組んでいる。今後も研究内容を教育に還元すべく、学会発表および論文発表に尽力するために、領域内で協力し合う風土を継続させて、学内・学外研究者とも協力し、時間や環境のマネジメントをしながら取り組んでいきたい。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Nakano M, Nakamura M, Furuchima S, Sato M, Hasegawa N, Sasaki A. Educational effect of a nursing training conference adopting the world café method: medical care teams. J Nurs Educ Pract 2019; 9(8): 91-8.
- 2) Kanda K, Fujimoto K, Mochizuki R, Ishida K. De-

velopment and validation of the comprehensive assessment scale for chemotherapy-induced peripheral neuropathy in survivor of cancer. BMC Cancer 2019; 19(1) : 904-15.

- 3) Kubo Y, Fumiko F, Takahashi K, Satake S, Ishikawa J, Mochizuki R, Shimasawa J, Kita M. Clarification of Self-motivated learning behaviors among undergraduate nursing students in Japan. Jikeikai Med J 2019; 66(1-4) : 17-29.
- 4) 中村美鈴. 救急医療における患者・家族の治療に対する意思決定支援への新たな視座. 保健医療者論集 2020 ; 30(2) : 1-8.
- 5) 明神哲也, 福田美和子, 岡部春香, 和田美也子, 本田多美枝. クリティカルケア領域に勤務する卒後2年目初期の看護師の実践に対する認識. 日クリティカルケア看会誌 2018 ; 14 : 113-23.

II. 総 説

- 1) 竹内由佳, コリー紀代, 二宮伸治, 小水内俊介, 金井理, 浅賀忠義, 中村美鈴, 井上創造, 村田恵理, 萬井太規, 近野 敦. 気管内吸引手技中の視線計測による看護師と看護学生の習熟度の比較. 医工治療 2019 ; 31(3) : 171-9.

III. 学会発表

- 1) Saeki H, Nakamura M, Nagano M. Communication skills of nursing when responding to emergencies: a literature review. EAFONS 2020 (23rd Ease Asian Forum of Nursing Scholars). Chang Mai, Jan.
- 2) Asakawa M, Colley N, Komizunai S, Konno A, Murata E, Mani H, Asaka T, Inoue S, Nakamura M, Ninomiya S. Effective motion of endotracheal suctioning catheter and viscosity of secretion. CIPP XVIII (18th International Congress on Pediatric Pulmonology) Chiba, June.
- 3) Takeuchi Y, Colley N, Komizunai S, Ninomiya S, Murata E, Mani H, Asaka T, Inoue S, Nakamura M, Konno A. Eye-tracking technology for skill assessment of endotracheal suctioning between expert nurses and nursing students. CIPP XVIII (18th International Congress on Pediatric Pulmonology) Chiba, June.
- 4) Osanai M, Colley N, Komizunai S, Ninomiya S, Murata E, Mani H, Asaka T, Inoue S, Nakamura M, Konno A. Identification of criterion values for endotracheal suctioning using a motion capture system. CIPP XVIII (18th International Congress on Pediatric Pulmonology) Chiba, June.
- 5) Manya R, Colley N, Komizunai S, Ninomiya S, Mu-

rata E, Mani H, Asaka T, Inoue S, Nakamura M, Konno A. Learning outcome evaluation between 2D video and 3D CG animation utilizing an eye-tracking technology. CIPP XVIII (18th International Congress on Pediatric Pulmonology) Chiba, June.

- 6) 永野みどり, 江川安紀子, 伊藤寿啓, 佐藤正美, 中村美鈴. (口頭) 診療記録から見た入院時褥瘡保有患者の特性. 第28回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会. 奈良, 5月. [日創傷オストミー失禁管理会誌 2019 ; 23(2) : 239]
- 7) 山本伊都子, 中村美鈴. (口頭) クリティカルケア看護における看護実践に対する困難尺度の開発. 第15回日本クリティカルケア看護学会学術集会. 別府, 6月.
- 8) 角田真由美, 佐藤正美, 青木祥子. (ポスター) 緩和ケアリンクナースをメンバーとした事例検討会での学び. 第24回日本緩和医療学会学術大会. 横浜, 6月. [Palliat Care Res 2019 ; 14(Suppl.) : S28]
- 9) 佐藤正美. (ポケットセミナーVII) 「看護診断: 意思決定葛藤」ってなんだ? 第25回日本看護診断学会学術大会. 名古屋, 7月. [看護診断 2019 ; 24(2) : 70]
- 10) 福田美和子, 本田多美枝, 岡部春香, 明神哲也, 坂本なほ子. (ポスター) リフレクティブな対話を促進するグループリフレクションにおけるファシリテートの要素. 日本看護学教育学会第29回学術集会. 京都, 8月.
- 11) 石原千晶, 石田和子, 細川 舞, 京田亜由美, 望月留加, 藤本佳子, 神田清子. (ポスター) 末梢神経障害を伴うがん患者に対するチーム医療における多職種との認識と行動. 日本看護研究学会第45回学術集会. 大阪, 8月. [日看研会誌 2019 ; 42(3) : 606]
- 12) 室岡陽子, 根本秀美, 光田益士, 小野 大. (口頭) 3軸触覚センサーを用いた踵部の圧力およびずれ力の実態. 第21回日本褥瘡学会学術集会. 京都, 8月. [褥瘡会誌 2019 ; 21(3) : 337]
- 13) 光田益士, 室岡陽子, 小野 大, 根本秀美. (口頭) 3軸触覚センサーを用いた圧力およびずれ力の計測—ドレッシング材の機能比較—. 第21回日本褥瘡学会学術集会. 京都, 8月. [褥瘡会誌 2019 ; 21(3) : 338]
- 14) 永野みどり. (口頭) 直腸がんによるストーマ造設術後のケアニーズの要因. 第51回東京ストーマリハビリテーション研究会学術集会. 東京, 9月. [日ストーマ・排泄会誌 2019 ; 35(3) : 121]
- 15) Colley N, Nakamura M. (Oral) Feasibility of optic orbit and the pupil diameter as the nursing skill evaluation criteria. 第39回日本看護科学学会学術集会. 石川, 12月.
- 16) Nagano M, Egawa A, Aiso M, Ninomiya T, Ko-

bayashi M, Sakamoto M, Maruyama H, Sato M, Tokunaga K, Nakamura M. Characteristics of patients with pressure injuries from home found upon hospitalization. 8th Asia Pacific Enterostomal Therapy Nurses Association, APETNA 2019. Taipei, Nov.

- 17) Murooka Y, Nemoto H, Kohta M, Ono D, Soma S. (Poster) In parallel measurement of pressure and sharing force on heel and its effect on applying dressing for pressure injury prevention. 8th Asia Pacific Enterostomal Therapy Nurses Association, APETNA 2019. Taipei, Nov.
- 18) 坂本なほ子, 小山田恭子, 福田美和子. (ポスター) 卒業時における看護学生の自己肯定感と健康管理能力の関連. 第39回日本看護科学学会学術集会. 石川, 12月.
- 19) 本田多美枝, 福田美和子, 高堂香葉子. (ポスター) 地域中核病院に勤務する看護管理者の「省察の実践」の現状と課題. 第39回日本看護科学学会学術集会. 石川, 11月.
- 20) 伊東佑里子, 望月留加, 佐藤正美. (口頭) 術後化学放射線療法を受けた頭頸部がん患者のセルフケアの様相. 第34回日本がん看護学会学術集会. 東京, 2月.

IV. 著 書

- 1) 佐田尚宏, 中村美鈴編. ドレーン & チューブ管理マニュアル: 特定行為に役立つ 臨床に活かせる. 改定第2版. 東京: 学研メディカル秀潤社, 2019.
- 2) 三原 弘, 土肥直樹, 稲森正彦, 明石恵子, 佐藤正美編. ナーシンググラフィカ EX: 疾患と看護③: 消化器. 大阪: メディカ出版, 2020.
- 3) 佐藤正美. 第3章: クリティカルな患者の病態の理解と看護 E. 消化機能障害. 山勢博彰著者代表. 系統看護学講座 別巻: クリティカルケア看護学. 第2版. 東京: 医学書院, 2020. p.116-34.
- 4) 室岡陽子. Chapter 4: 各科に共通するスキントラブルの予防・対応 7. スキンケアの予防・対応. 内藤亜由美, 安部正敏編. スキントラブルケアパーフェクトガイド: 病態・検査・治療・予防・ケアがすべてわかる! 改定第2版. 東京: 学研メディカル秀潤社, 2019. p.231-9.
- 5) 明神哲也. 1. 呼吸器疾患を学ぶための基礎知識 3. 呼吸器科で行われる検査と看護 10. 胸水穿刺, 11. 経皮的肺生検, 12. 気管支鏡検査. 讚井將満, 宇都宮明美, 加茂徹郎, 本城綾子編. ナーシンググラフィカ EX: 疾患と看護①: 呼吸器. 大阪: メディカ出版, 2020. p.50-9.

V. その他

- 1) 室岡陽子編集協力. 周術期のスキントラブル 術

中・術後に生じる褥瘡・MDRPU・スキンケア・IADを防ぐ! 看技 2019; 65(9): 901-49.

- 2) 明神哲也. 【急性期だからこそ取り組むべき救急・集中治療領域における終末期ケア】(Part 1) 救急・集中治療領域における終末期ケアとは何か. 看技 2020; 66(3): 220-4.

老年看護学

教授: 梶井 文子 老年看護学
准教授: 中島 淑恵 老年看護学

教育・研究概要

I. 学部教育

老年看護学の学部教育は、2012年度の改正カリキュラムによる実習内容の変更に伴い、超高齢社会ならびに地域包括ケアシステムの構築といった新しい保健・医療・福祉システムの中での高齢者への多様な看護支援を理解できることをねらいとしてきた。さらに2017年度からは、2015年度からの変更の上に看護学科ディプロマポリシー (DP) を意識した新カリキュラム編成に基づく科目構成となり、地域の医療機関、高齢者施設、自宅に在住する多様な健康課題をもつ高齢者への看護支援ならびに地域・保健医療福祉に関わる多職種連携を学習するために必要な知識の理解を強化するように以下の各科目内容を再構成した。特に新カリキュラム科目編成となった学年は1年次、2年次、3年次である。

1. 老年看護学概論 (新カリキュラム科目)

1年次前期の老年看護学概論では、加齢に伴う心身の生理的变化および社会環境の変化が高齢者の生活に与える影響、高齢者看護における人権擁護と倫理問題、我が国の高齢者政策の現状と課題について考え、学生が自身の意見や考えを他者に述べる事ができるような教育方法を教授した。

2. 看護対象論—老年期 (新カリキュラム科目)

1年次後期の看護対象論内の老年期では、高齢者の疑似体験や実際の大学周辺の地域に在住する高齢者との交流等の演習、福祉機器の展示会場の見学を通じて、健康な高齢者の理解を深めるように教授した。

3. 老年看護方法論 I (新カリキュラム科目)

2年次後期の老年看護方法論 I では、老年期の人々に多くみられる症状 (低栄養、摂食・嚥下機能の低下、認知症、せん妄・うつ、骨・関節疾患、転倒、失禁等) を中心とし、その看護アセスメントならびに老年症候群と自立支援・介護予防に向けた看護実

践を教授した。

4. 老年看護方法論Ⅱ（新カリキュラム科目）

3年次前期の老年看護方法論Ⅱでは、運動機能障害をもち、認知機能障害がある虚弱高齢者の生活機能維持向上に必要なリハビリテーション看護技術、皮膚の管理方法（褥瘡予防のためのポジショニング、褥瘡皮膚ケア）、ならびに摂食嚥下機能障害のある高齢者への口腔ケアと間接・直接訓練法の摂食・嚥下リハビリテーション看護の技術について教授した。

5. 看護過程Ⅲ－老年看護学（新カリキュラム科目）

3年次前期の看護過程Ⅲは、老年看護学、小児看護学、母性看護学、在宅看護学、精神・地域看護学各領域から構成され、各専門領域の人々の多様な健康課題を明らかにし、それらの課題を解決するための解決策を見出し、実践・評価する能力の修得を目的とする科目である。老年看護学領域では、高齢期に特有な複数疾患を持ち、健康障害に伴う急性状態、回復状態にある高齢者とその家族の事例を包括的にアセスメントし、健康の回復とその人らしい生活の再構築に向け、生活の質を考慮した課題解決プロセスとしての看護過程演習を教授した。

6. 臨地実習

1) 老年看護学実習Ⅰ（新カリキュラム科目）

3年次後期の老年看護学実習Ⅰでは、脳血管疾患や運動器疾患等の障害をもつ1名の高齢患者を受け持ち、術後の急性状況およびリハビリ期における身体・精神・社会面の特性を理解し、さらに退院後の自立支援に向けたリハビリテーションを生かした看護過程の実践と多職種連携におけるチーム医療、ならびに看護職の役割について教授した。

2) 老年看護学実習Ⅱ

障害を抱えながら地域で生活する高齢者とその家族の特性を理解し、地域の保健・医療・福祉サービス機関と連携しながら、高齢者が地域で生活し続けるための継続看護を実践する能力と態度を養うために、4年次前期に介護老人保健施設、認知症対応共同生活介護（認知症グループホーム）、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所での実習を通して地域医療福祉における多職種連携と看護職の役割について教授した。

3) 総合実習（継続看護コース）

4年次後期の継続看護コースでは、慢性疾患等をもちながら在宅で生活する高齢者の受診の背景（要因）や、医療機関の救急外来を含む外来受診時の、心身・社会的な状況、看護の役割や各外来の専門性のある看護実践を理解することを教授した。

Ⅱ. 研究

領域内で取り組んでいる研究活動は、以下の1つである。

1. 第三病院地域連携型認知症疾患医療センターを担う3科（精神神経科、脳神経内科、脳神経外科）の外来を受診する認知症者の家族介護者の困りごと調査を実施し、家族介護者の属性による分析を行い、報告書にまとめた。（2019年度看護学科研究費にて）

「点検・評価」

1. 教育

学部教育である老年看護学の新カリキュラムによる授業・実習は、3年次まで開講されている。学生が地域包括ケアシステムの中で地域・在宅で生活する高齢者とその家族に対する理解と看護技術を修得できるように、老年看護学に関連する授業と実習を連動した授業内容ならびに演習内容を改善することができた。

2. 研究

研究活動については、今年度は1研究テーマについての研究が遂行されていた。看護学科研究費によって、第三病院認知症疾患医療センターと共同研究が実施できた。今後は外部競争的研究費の資金による研究の獲得を目指す必要がある。現在分析中のデータも含め、学会発表ならびに論文にて公開していく必要がある。

研究業績

Ⅰ. 原著論文

1) Kubo Y, Kajii F, Takahashi K, Satake S, Ishikawa J, Mochizuki R, Shimasawa J, Kita M. Clarification of self-motivated learning behaviors among undergraduate nursing students in Japan. *Jikeikai Med J* 2019; 66(1-4): 17-29.

Ⅲ. 学会発表

1) 千吉良綾子, 石井卓也, 梶井文子, 八城直子, 内木場あゆみ, 松橋美奈, 野中俊宏, 岡 尚省, 矢野勝治, 中村 敬. (ポスター) 地域連携型認知症疾患医療センター市民講座参加者の認知症支援ニーズ: 第一報 - 認知症への心配および介護経験の有無に焦点をあてて -. 第20回日本認知症ケア学会大会, 京都, 5月. [日認知症ケア会誌 2019; 18(1): 177]

2) 梶井文子, 石井卓也, 八城直子, 内木場あゆみ, 野中俊宏, 泉 佑介, 赤川直子, 小松雅子, 多羽田章子, 中村 敬. 地域連携型認知症疾患医療センター市民講座参加者の認知症支援ニーズ: 第二報 - 家族介護者の

続柄別の健康状態・介護負担感の差異に関する検討－
第20回日本認知症ケア学会大会. 京都, 5月. [日認知症ケア会誌 2019; 18(1): 177]

- 3) 梶井文子. (ポスター) 現任看護師の認知症者と家族に対する看護への関心に対する要因と今後の教育ニーズ. 日本老年看護学会第24回学術集会. 仙台, 6月. [日本老年看護学会第24回学術集会抄録集 2019; 221]
- 4) 荻原裕恵, 梶井文子. (ポスター) 看護学生の実習達成感を導く実習の特徴と学生の内的変化に関する文献検討. 日本看護学教育学会第29回学術集会. 京都, 8月. [日看教会誌 2019; 29(学術集会講演集): 165]
- 5) 塚本咲子, 梶井文子. (ポスター) 基礎看護学における日常生活援助技術の学習効果を導く教授方法－ビデオ映像の学習効果に関する文献検討－. 日本看護学教育学会第29回学術集会. 京都, 8月. [日看教会誌 2019; 29(学術集会講演集): 177]
- 6) 小林明美, 梶井文子. (ポスター) 臨地実習における看護教員自身のリフレクションの気づきに関する文献検討. 日本看護学教育学会第29回学術集会. 京都, 8月. [日看教会誌 2019; 29(学術集会講演集): 196]
- 7) 梶井文子, 青木紀子, 山田高広, 平本 淳, 遠藤広二, 錦織さつき. (ポスター) 医学科5年生と看護学科4年生の共修実習プログラムの初実施における評価と課題. 第136回成医会総会. 東京, 10月. [慈恵医大誌 2019; 134(6): 117-8]
- 8) 梶井文子. (シンポジウム6: 終末期(End of Life Care)における栄養) 多職種による高齢者の最期まで「食べること」を支援するための栄養ケア. 第41回日本臨床栄養学会総会・第40回日本臨床栄養協会総会第17回大連合会. 名古屋, 10月. [New Diet Ther 2019; 35(2): 103]

IV. 著 書

- 1) 梶井文子. Part 2: Practice 1. 感染予防につながる日常のケア ②栄養管理, Part 3: Assessment Tool アセスメントツール 9. 脱水リスクのアセスメントツール. HAICS研究会 PICS プロジェクト編著. 訪問看護師のための在宅感染予防テキスト. オールカラー改訂第2版. 大阪: メディカ出版, 2020. p.77-83, 160.

V. その他

- 1) 梶井文子. 地域看護に活用できるインデックス (No.23) 高齢者の摂食・嚥下機能, 口腔機能の低下の早期発見のためのインデックス. 日地域看護会誌 2019; 22(1): 73-8.
- 2) 梶井文子. 【高齢者の栄養管理パーフェクトガイド】(Part 3) 高齢者の疾患・病態等の栄養管理 終末

(EOL) 期における栄養の考え方, 実践法. 臨床 2019; 135(4): 555-60.

- 3) 梶井文子. 東京慈恵会医科大学附属第三病院認知症疾患医療センター・医学部看護学科共同研究 2019年度認知症疾患医療センター外来における家族介護者の困りごと調査報告書. 千葉: 正文社, 2020.

精神看護学

教授: 小谷野康子 精神看護学
准教授: 山下真裕子 精神看護学
講師: 石川 純子 精神看護学

教育・研究概要

I. 教育

精神看護学の授業は, 学年進行とともに概論, 方法論Ⅰ, 方法論Ⅱ, 領域実習, 総合実習が専門科目として設定されている。概論では, 脳と様々な精神機能, 心の構造と働き, 心の発達理論を紹介しつつ, ライフサイクルにおける精神保健上の問題, 地域における精神保健活動, 災害とこころ, メンタルヘルスの保持とその方法等, 精神保健を中心とした講義を行うとともに, 授業後半では精神医療の歴史と人権擁護とともに関連法規について学修した。講義に加え防衛機制的レポートを課すことにより知識の定着を図った。東日本大震災における被災者のこころの闘いについては, 実録視聴覚教材を用いて惨事ストレスのトラウマティックな体験が如何にこころに打撃を与えたかについて学修した。

精神看護方法論Ⅰでは, 精神医学講座の医師が代表的な精神疾患の原因, 症状, 薬効, 副作用を専門家の視点から解説した。その後, 看護師の視点, 当事者の視点から疾患を抱えた生活を捉え直し具体的な看護問題を考察する授業を行った。また, 精神科医療における倫理的課題についてディベートを取り入れて考察する機会を設けた。また, 精神保健福祉法を基本法として行われる現在の日本の精神医療・精神看護について, 対象者の行動制限のとらえ方, 支援の在り方についてクリティカルな視点で考察する能力を育てることをめざした。e-ラーニングシステムの活用を試み, 学生が主体的に学習できるような仕掛けづくりに心がけ, 授業外学習を活かしながら具体的な看護の展開方法について学修した。

2019年度より, 新カリキュラムの精神看護方法論Ⅱが開講となった。講義コマであるが, 精神看護の実技も含め, 実習前の集大成としてまとめる貴重な学修内容とした。これまでの学びに加え, 精神看

護の核となる人間関係論やセルフケア理論を学びながら精神科疾患の事例についてさらに理解を深めた。看護過程Ⅲとも連動させながら授業構成を工夫し、卒業生を招いた実践的な授業内容も取り入れた。また、eラーニングシステムを活用しながら学生との双方向性学習を心掛けた。

精神看護学実習では、精神科単科病院2病院で2週間の実習を行った。それぞれが専門病院であり慢性閉鎖病棟、スーパー救急閉鎖病棟、急性期治療病棟での実習となり、様々な疾患、病期、発達段階の対象を受け持ち、専門性の高い学修となった。

総合実習の2週間は、福祉的支援の場の精神障害者を対象とする地域事業所と医療的支援の場である精神科病院、森田療法センターの3ヶ所で実習を行った。地域での実習は就労継続支援B型事業所(クラブハウス)で当事者と活動をともにし、ミーティングにも参加した。地域で暮らす精神障害者の居場所であり、活動の場であり、就労機能のある当該事業所での実習により障害を持ちながらも支援を受けながら地域で生活する精神障害者への福祉的支援について、看護職と精神保健福祉士との多職種連携を考える機会となった。森田療法センターでは、対象の特徴を理解し、森田療法における看護師の役割について理解を深めた。精神科病院の実習は、急性期閉鎖病棟で患者を受け持ち、看護過程を展開しつつ、看護師とともに看護業務のシャドーイングを実施した。

II. 研究

1. 非包括的弁証法的行動療法 (DBT) スキル訓練の有効性文献レビューの結果から (小谷野康子, ファイザー・アカデミック・コントリビューションによる)

本研究では、DBT スキル訓練に焦点を当て、その有効性を文献レビューから明らかにすること目的とした。スキル訓練を中心としたDBTのRCT論文についてLinehan Instituteに掲載されているエビデンスベースの15論文とDBTマニュアルに集約された15論文、PubMedから2015年以降のDialectical Behavior Therapyで検索されたRCT論文で、重複を除外した入手可能な計18論文を分析の対象とした。

研究対象は、境界性パーソナリティ障害 (BPD) が最も多く、気分障害 (不安障害との併存含む)、摂食障害、注意欠陥多動性障害 (ADHD)、外傷後ストレス障害 (PTSD) であった。

コントロール群と有意な差が認められたアウトカ

ム指標は、Beck Depression Inventory (BDI) による抑うつの評価が最も多く、これらの改善、加えて問題行動 (標的行動) の減少・改善、不安や怒りなど感情調節機能の改善、またそれらのより早い回復が認められていた。本研究において、非包括的なDBTスキル訓練に焦点を当てた文献検討の結果、非包括的なDBTスキル訓練は治療脱落が少なく、十分な介入効果があることが明らかになった。

2. 精神障がい者の地域生活におけるセルフケア評価尺度の開発 (山下真裕子, 科学研究費補助金基盤研究 (C), 2019年度)

精神障がい者が地域生活を送る上で必要なセルフケアの概念分析および質的研究結果をもとに尺度原案を作成した。精神科病院に入院する患者191名を対象に、質問紙調査を実施し、尺度の信頼性、妥当性を検証した。調査の結果、本尺度の信頼性および内容的妥当性、収束的妥当性、構成概念妥当性を確認できた。以上の結果より、本尺度は精神障害者のセルフケアを簡易的に評価できる尺度であることが確認できた。

3. 精神科救急医療における患者移送に関する研究: 東京都における民間救急患者移送についての聞き取り調査 (石川純子, 日本精神科救急学会研究助成, 2019年度)

東京都における患者移送の実態調査を臨床スタッフと共同で行っている。今年度は、民間救急事業者を対象に、聞き取り調査を行った。現在、データを分析中である。引き続き、患者家族を対象とした調査を継続的に実施する予定である。

「点検・評価」

1. 教育

精神看護学の授業はディプロマポリシーの「倫理的姿勢」や「課題解決能力」、「メンバーシップ・リーダーシップ」を涵養する科目である。授業開始の冒頭でそれらを保障する科目であることを学生に意識づけるとともに、これらの達成を強化する授業内容にする必要がある。レポートの重みづけの検討や自身で問題を発見できるような課題設定を検討したい。

また、学生が主体的に学べるための動機づけを強化する必要がある。eポートフォリオ、eラーニングといった既存のシステムを活用しながら今後も検討していく。

2. 研究

外部資金の獲得、学科内研究費の獲得により研究が進行中である。研究は分析中のものもあるが、論

文として誌上発表できるように準備をしていきたい。また、精神科医療施設における共同研究も継続的にを行い、大学と臨床との連携、多職種連携による地域貢献などにも引き続き注力していきたい。

研究業績

II. 総説

- 1) 石川純子, 横溝 愛, 塩月玲奈, 西山晃好. わが国における非自発入院に関する研究の動向と今後の課題. 精神科看護 2019; 46(5): 62-8.

III. 学会発表

- 1) Koyano Y. Non-comprehensive dialectical behavior therapy with a focus on mindfulness and skill training. The Sigma Theta Tau International 30th International Nursing Research Congress. Calgary, July. [Sigma Theta Tau International Nursing Research Congress 2019; 86]
- 2) 小谷野康子. 非包括的弁証法的行動療法スキル訓練の有効性 文献レビューの結果から. 第39回日本看護科学学会学術集会. 金沢, 11月. [日看科学会講集 2019; 39回: PC-34-06]
- 3) 山下真裕子. 精神障害者の地域生活におけるセルフマネジメント評価尺度の有用性の評価 ケースコントロールスタディによる検討. 第39回日本看護科学学会学術集会. 金沢, 11月. [日看科学会講集 2019; 39回: PA-7-15]
- 4) 山下真裕子. 精神障がい者の地域生活におけるセルフケア構成要素の検討. 日本精神保健看護学会 29回学術集会・総会. 名古屋, 6月. [日精保健看護会抄集 2019; 29回: 142]
- 5) 山下真裕子. 精神障害者の地域生活におけるセルフケア評価尺度の開発. 日本看護研究学会第45回学術集会. 大阪, 8月. [日看研会誌 2019; 42(3): 570]

IV. 著書

- 1) 石川純子. 第I部: 症状別看護ケア関連図 3. うつ. 川野雅資編著. エビデンスに基づく精神科看護ケア関連図. 改訂版. 東京: 中央法規出版, 2020. p.18-25.

V. その他

- 1) 山下真裕子. 福祉の現場から 精神障害者の地域生活におけるセルフマネジメント支援. 地域ケア 2019; 21(10): 70-2.

小児看護学

教授: 高橋 衣 小児看護学

講師: 永吉美智枝 小児看護学

教育・研究概要

学部教育では、概論および方法論・演習を学内講義とし、小児病棟・小児外来・母子医療センター・NICU・GCU・通園（所）支援施設実習で小児看護実践能力を習得し教育評価を行った。特に、日常的な臨床場面での子どもの権利擁護の実践を高めるための教育方法・学生が主体的に技術演習に取り組むための教育方法を検討した。4年生総合実習（小児臨床看護コース）では、Family-centered care コースと小児地域連携コースを設定し、地域連携と多職種連携における看護師の役割を習得した。

研究では、子どもの権利擁護に関する研究、看護教育に関する研究、小児がん経験者の長期フォローアップに関する研究、発達障害児に関する研究に取り組んでいる。

I. 日本の看護系大学生の主体的学修行動尺度の開発

本研究の目的は、日本の看護系大学生の主体的な学習行動に関する尺度を開発することである。23人の学生に半構造化面接を行った。データは質的記述的方法で分析された。結果、主体的な学習行動に関連する273のコード、66のサブカテゴリー、19のカテゴリーが明らかとなった。(Jikeikai Med J 2019; 66(1-4): 17-29)

II. 小児がん経験者の進路選択の動機と課題

本研究の目的は、入院中に病院内教育を受けた小児がん経験者について、治療終了後の成長発達過程における進路選択の動機と課題を明らかにし、心理社会的な長期フォローアップのあり方を検討することとした。18歳以上26歳未満の14名を対象にした。1時間程度の半構造化面接を行い、質的記述的分析を行った。進路選択の動機は43コード、16サブカテゴリーから6カテゴリーが抽出された。進路選択上の課題には、「後遺症や体力低下、学習の遅れに伴う進路選択の難しさ」、「病気経験をもつことによる進学・就職の困難さ」の2カテゴリーが抽出された。医療者と院内学級教員は、治療開始時期から社会へ出るためのキャリア教育と進路選択上の課題を意識した支援を開始し、治療終了後も医療と教育が

連携した長期フォローアップの必要性が示唆された。(The 51th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP 2019))

Ⅲ. 小児がん治療を受ける子どもにとっての院内学級という場の意味

入院中の子どもにとっての病院内学級の場のもつ意味を明らかにすることを目的に、半構造化インタビューを実施した。対象者は小児がんの入院治療中に病院内教育を受けた経験をもつ18歳以上26歳未満の小児がん経験者14名とした。小児がん治療で入院中の病院内学級の場の意味として、77のコードから23のサブカテゴリー、8のカテゴリーが生成された。小児がんを発症した子どもは、入院直後は病院という新たな社会で過ごす他の子どもが登校する様子を見たり、働きかけにより登校をはじめていた。入院治療により心身に様々な変化を生じるなか、病院内学級に通うことで、入院前の日常性が維持され、入院前から退院後までの連続性が確保されていた。副作用による身体の辛さが、気分により軽減することを体験し、自己の体調と気分を変えられることを経験し、自己の体調と気分を変えられる場と認識されており、病院内学級が緩和ケアとして機能をもつようになっていた。子どもは病院内学級に行くことで、「普通の子ども」として入院前の生活に戻ることができ、成長発達する子どもにとって、学校への所属感・帰属感を維持する重要な環境であることが示唆された。(日本育療学会第23回学術集会)

Ⅳ. 重症心身障害者のきょうだい研究に関する文献検討

本研究では、重症心身障害児のきょうだいに関する看護研究への示唆を得るために、国内における障害児、および重症心身障害児のきょうだい研究の現状を概観することを目的とした。2008年以降の原著論文、医中誌 Web を使用し「きょうだい or 同胞」、「障害児 or 障がい児」、「重症心身障害児 or 重症心身障がい児」、「医療的ケア」でキーワード検索を行い、30件を対象文献とした。結果、きょうだいは、同胞からの影響として、成長過程で身体症状、精神症状、行動上の問題が指摘された。特に、希薄な母子関係の中で成長してきていることが推測される在宅で医療的ケアを受ける重症心身障害児(者)のきょうだいに対して、ライフコースの視点で捉える研究の必要性が示唆された。(日本小児看護学会第29回学術集会)

Ⅴ. 子どもに携わる看護師を対象とした子どもの権利擁護実践を高める教育プログラムの開発と検証

子どもの権利条約批准後、子どもの権利擁護の重要性が周知されてきた。総合病院では、患者の権利擁護に関する教育が実施されている。しかし、患者の多くを占める成人を対象とした教育が中心である。子どもに携わる看護師は、子どもの権利擁護について学ぶ機会が極めて少ない。本研究は、「子どもに携わる看護師を対象とした子どもの権利擁護実践を高める教育プログラム」を開発・試行し、課題を明らかにして改良した上で、子どもに携わる看護師が業務している施設に配信していくことを目的としている。

看護師・医師・看護学教員・倫理に関する研究者で構成される研究チームでプログラムを構築し、プログラムの試行・評価を行った。プログラムは、1. リラックスして相手を知ろう、2. 子どもの権利擁護をめぐってどのようなことが起きているの、3. 他職種との子どもの権利擁護実践の協働体験-困った時どうしたらいいの、4. take-home message-病棟に持ち帰ってほしい研修体験、の4部構成である。試行の結果、参加者全員のプログラム目標の評価(5段階評価)は、平均値 $4.7 \pm SD$ であった。プログラムに参加した看護師の子どもの権利擁護実践状況を追跡して、プログラムの効果を明らかにしていく予定である。

Ⅵ. 子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度(改訂版)の開発

本研究は、先行研究「子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度」(高橋、瀧田、2019)の課題を再検討し、「子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度」の信頼性と妥当性を高め改訂版を作成することを目的としている。第1段階の子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度の尺度項目案の再検討を行い、30項目案が作成された。今後、尺度案の内容妥当性の検討を行い、尺度の信頼性・妥当性の検証をすすめ、子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度(改訂版)の開発する予定である。

「点検・評価」

教育では、新カリキュラムにおいて実施した子どもの権利擁護・成長発達・健康増進、Family centered care の中心概念であるパートナーシップを重視した4年間の系統的な教育方法および内容について

て、実施状況および、学生の成績・授業評価を参考に評価し、次年度の授業の改善を図る。また、看護研究では、学生が研究的な思考で子どもの現状を考察する方法、技術の習得と臨床へ還元する視点をもてる教育を行う。

研究では、それぞれの教員が取り組んでいる研究において明らかになった課題を基に、継続的に追及していく。また、附属病院との共同研究を推進していく。さらに、外部研究資金の獲得および研究に取り組み、学部教育・現任教育・小児看護への還元を目指す。

研究業績

I. 原著論文

- 1) [Kubo Y](#), [Kajii F](#), [Takahashi K](#), [Satake S](#), [Ishikawa J](#), [Mochizuki R](#), [Shimasawa J](#), [Kita M](#). Clarification of self-motivated learning behaviors among undergraduate nursing students in Japan. *Jikeikai Med J* 2019; 66(1-4): 17-29.

III. 学会発表

- 1) 谷川弘治, 永吉美智枝, 斉藤淑子, 足立カヨ子, 高橋陽子. (ポスター) 小児がん経験者の退院後の発達過程における自己に対する認識. 第61回日本小児血液・がん学会学術集会. 広島, 11月.
- 2) [Nagayoshi M](#), Saito Y, Adachi K, Takahashi Y, Tanigawa K. (Poster) Motivation and challenges of making career choices during the growth process after treatment completion in child cancer survivors. The 51th Congress of the International Society of Paediatric Oncology (SIOP 2019). Lyon, Oct.
- 3) 永吉美智枝, 斉藤淑子, 足立カヨ子, 高橋陽子, 谷川弘治. (口頭) 小児がん治療を受ける子どもにとっての院内学級という場の意味. 日本育療学会第23回学術集会. 横浜, 8月.
- 4) 斉藤淑子, 永吉美智枝, 足立カヨ子, 高橋陽子, 谷川弘治. (口頭) 小児がん経験者の院内学級の友だちとの関わりの意味. 日本育療学会第23回学術集会. 横浜, 8月.
- 5) 土屋さおり, [高橋 衣](#). 重症心身障害者のきょうだい研究に関する文献検討. 日本小児看護学会第29回学術集会. 札幌, 8月.

母性看護学

教授：細坂 泰子 育児支援, 母乳育児, 周産期ケア

講師：濱田真由美 授乳支援, セクシュアリティ, 質的研究

教育・研究概要

母性看護学領域では、母性看護学概論・周産期看護方法論ⅠおよびⅡ、看護過程Ⅲの講義・演習科目を経て、看護実践能力と課題解決能力を習得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては、女性のライフスタイル各期における様々な健康問題について研究し、研究員各自の専門性に依拠したテーマでの探索を行った。

I. 学部教育

母性看護学における学部教育は2018年度と同様、4年間を通してDP2の課題解決能力の育成に焦点をあて、同時にDP3のパートナーシップやDP5の倫理的姿勢の修得を図った。

母性看護学概論では、性と生殖に関する基本的な知識に加え、母性看護を実践する上での多様な思考力を養うことを科目のねらいとした。科目は講義、討議およびディベートで教授した。周産期看護方法論Ⅰでは、妊娠・分娩期における対象の身体的・心理的・社会的変化と生活への適応やその看護ケアの学習を科目のねらいとした。科目は講義、演習、個人ワークで教授した。周産期看護方法論Ⅱは、産褥期における対象の身体的・心理的・社会的変化と生活への適応および新生児期の生理的特徴について学び、母子を中心とした家族への援助を学ぶことを科目のねらいとした。看護過程Ⅲの開講に伴い授業回数が7回と減少したため、精選した内容を教授したり、演習内容の一部を看護過程Ⅲへ移動した。看護過程Ⅲでは、産褥・新生児期にある母子とその家族を対象にウェルネスの視点で看護問題解決に向けた看護計画立案、事例への倫理的配慮と看護実践を科目のねらいとした。科目は講義、個人・グループワーク、演習で教授した。科目は講義、演習、個人・グループワークで教授した。また2年次必修の演習科目として行われる家族看護論では、家族看護学に必要な様々な理論や技法を学ぶことで、健康な家族のあり方について学ぶことを科目のねらいとした。これらの授業を経た上で、臨地実習での実践を行った。

母性看護学実習では、妊娠・分娩・産褥期および

新生児期を中心とした母性看護学の対象者とその家族に対し、看護過程を展開するための基礎的実践能力を養うことをねらいとした。産科外来での妊婦健診やハイリスク新生児室での見学実習、産婦・褥婦とその新生児を受け持つウェルネス看護過程を展開する病棟実習を通して、母性看護学で必要な看護支援について教授した。また総合実習では特に将来、助産師養成課程に進学する意志のある学生を対象に、助産院と総合母子健康医療センターという異なる特徴をもつ施設で実習を行った。地域における助産活動とハイリスク妊産婦へのケアを学び、今後の周産期医療のあり方について考える機会となっていた。

II. 研究

当該年度に領域内で取り組んだ主な研究活動は以下の5つである。

1. 母親および父親のしつけセルフリアージ尺度の開発

母親および父親のしつけセルフリアージ尺度の信頼性と妥当性を検討した。首都圏の幼稚園に通う保護者 191 家族の両親を対象に質問紙調査を実施した。項目分析、探索的因子分析、Cronbach's α 係数の検討を行い、信頼性と妥当性を確認した。それぞれの下位尺度の Cronbach's α 係数は 0.70~0.92 および 0.76~0.80 で、尺度の信頼性と妥当性が検証された。現在投稿準備中である。

2. 日本語版 Quality Assessment Tool for Quantitative Studies (J-QATQS) の等価性を担保した作成および信頼性の検討

本研究は量的研究を研究の質の観点から総合的に評価する尺度「Quality Assessment Tool」の日本語版 (J-QATQS) を作成し、そのプロセスを明らかにしたものである。尺度翻訳にはバックトランスレーション法を用いた。J-QATQS は利便性を鑑みチャート形式で作成した。作成した J-QATQS を和文の看護研究 21 本を用いて評価し、検者間信頼性を算出し、いずれも高い信頼性が得られた。本研究は論文化された。

3. 病産院での立ち会い分娩における夫への関わりに対する助産師の困難感

首都圏に従事する 10 年以上の助産師経験を有し、夫立ち会い分娩の経験がある助産師 5 名に半構造的面接による質的記述的研究を行い、病産院での立ち会い分娩における夫への関わりに対する助産師の困難感を明らかにした。立ち会い分娩における夫への関わりの困難感は、「分娩体験を共有し妻を理解しようとする姿勢の欠落」、「夫支援の煩わしさ」、「夫

への関わりの破綻」、「医師と助産師の立ち位置の違いによる夫支援への違和感」、「助産師不足から支援まで行き届かないやせなさ」、「夫への継続支援の限界」が抽出された。現在投稿中である。

4. NICU に入院した早産児の退院時栄養方法に関連する要因：完全母乳栄養群と混合栄養群の比較

全国の総合周産期母子医療センターに登録された 12 施設に子どもが入院中の早産児を養育する母親 360 名を対象として、退院時栄養方法を統計的に分析した。NICU 退院時に完母である要因として、最も影響があったのは、退院前まで母乳分泌量が維持されていることであった。現在投稿準備中である。

5. 自施設で出産した褥婦の退院時産後ケアニーズの実態調査

自施設で出産した褥婦が退院後に継続して産後ケアを希望するかを調査し、希望する褥婦の特徴や、希望する産後ケアニーズについての実態を明らかにした。平均出産年齢は 31.9±4.7 歳、平均妊娠週数は 38.8±1.8 週、児の平均出生体重は 2929.4±352.7g であった。産後ケア施設の認知度は 40.0%、利用希望の内訳は、利用したい 15 部 (33.3%)、補助があれば利用したい 22 部 (48.9%)、利用しない 8 部 (17.8%) であった。母児の属性と利用有無および補助有無との χ^2 独立性の検定では、有意差がみられた項目はなかった。2020 年度も継続して検討する予定である。

「点検・評価」

学部教育では授業評価において比較的高い評価を得られていた。今後、学生と教員との双方向性の授業となるよう教授方法を検討していく必要がある。研究活動については、各研究員が異なるテーマを選択することで母性看護領域の中で幅のある研究活動を実践できた。また各研究員が競争的資金を保有もしくは申請することができた。今後は研究の実践だけでなく、研究の公表にむけて研究を遂行していく課題がある。

研究業績

I. 原著論文

1) 細坂泰子, 柏崎真由. 日本語版 Quality Assessment Tool for Quantitative Studies (J-QATQS) の作成および信頼性の検討 等価性の担保を中心として. 慈恵医大誌 2019; 134(5): 75-81.

2) 佐藤さとみ, 細坂泰子. 特定保健指導の積極的支援対象者が初めての積極的支援を終了した過程 健康認

識と行動の変容に焦点をあてて。人間ドック 2019 : 34(3) : 497-505.

Ⅲ. 学会発表

- 1) 細坂泰子, 茅島江子. (ポスター) 乳幼児をもつ父親の育児と虐待の境界の様相. 第39回日本看護科学学会学術集会. 金沢, 12月. [日看科学会講集 2019 : 39回 : PA-23-08]
- 2) 末延睦与, 細坂泰子, 谷津裕子. (口頭) 夫立ち会い分娩における夫への支援に対する助産師の認識 夫への関わりの困難感に焦点を当てて. 第60回日本母性衛生学会総会・学術集会. 浦安, 10月. [母性衛生 2019 : 60(3) : 194]
- 3) 柏崎真由, 細坂泰子. (口頭) NICUに入院した早産児の退院時栄養方法に影響する要因. 日本小児看護学会第29回学術集会. 札幌, 8月. [日本小児看護学会学術集会講演集 2019 : 29 : 118]

地域看護学

教授 : 嶋澤 順子 地域看護学
講師 : 久保 善子 地域看護学
講師 : 清水由美子 地域看護学

教育・研究概要

教育に関しては2012年度入学生から保健師教育が選択制となり、実習体系も大きく変化したため、実習地との連携を強化して実習指導にあたっている。また、効果的な実習につなげる準備教育として、3年次の公衆衛生看護活動論においては近隣自治会の協力を得て、地域のキーパーソンへのインタビューや高齢者宅への家庭訪問、地区診断を演習に組み込んだ。

地域看護学では、教員が各々に3つの研究テーマについて取り組んでいる。1つ目は、独立型訪問看護ステーション看護師による在宅精神障害者地域生活支援モデル開発に関する研究の継続研究として実施している独立型訪問看護ステーションによる退院直後集中支援に焦点をあてた支援モデル開発に関する研究である。在宅精神障害者の地域生活移行支援において重視される退院直後の集中ケアにおける訪問看護の機能を明らかにすることを目指し、国内外の研究動向の整理を行い、公表した。次いで、多様な地域にある独立型訪問看護ステーションでの調査を進めている。2つ目は、ストレスチェック制度における産業看護職のコンピテンシーに着目し、質的に研究を進めている。また、看護系大学生の主體的

学修行動について、質的に研究を行い、尺度開発を行っている。3つ目は、地域で生活している血液透析患者の保健・福祉に関する研究である。また、近隣地区の住民が関係者と協働しながら互助の仕組みづくりを目指すプロセスの解明に向けてアクションリサーチを開始し、この一環として避難行動要支援者の実態調査を実施した。

さらに、第三病院との共同研究では、血液浄化部と外来維持透析患者の自己管理支援をテーマとして調査を実施し、分析結果を学内の研究会で報告した。

「点検・評価」

教育に関しては、保健師教育課程の選択学生が受講する公衆衛生看護学関連の科目・実習内容の検討を進めてきたのに対し、実習指導者からも一定の評価を得ているが、今後、教育評価研究につなげていきたいと考える。

各研究については、整理した調査データを調査対象者にフィードバックし、さらに各学会でその成果を発表した。今後も、外部研究資金の活用および応募を積極的に行い、研究継続を推進する予定である。また、第三病院との共同研究については、その調査結果を学内の研究会で報告した。

研究業績

I. 原著論文

- 1) Kubo Y, Fumiko F, Takahashi K, Satake S, Ishikawa J, Mochizuki R, Shimasawa J, Kita M. Clarification of self-motivated learning behaviors among undergraduate student nurses in Japan. *Jikeikai Med J* 2019; 66(1-4) : 17-29.
- 2) Sugisawa H, Shinoda T, Shimizu Y, Kumagai T, Sugisaki H. Psychosocial mediators between socioeconomic status and dietary restrictions among patients receiving hemodialysis in Japan. *Int J Nephrol* 2019; 2019 : 7647356.
- 3) Sugisawa H, Shinoda T, Shimizu Y, Kumagai T, Sugisaki H, Sugihara Y. Caregiving for older adults requiring hemodialysis: a comparison study. *Ther Apher Dial* 2019 Nov 6. [Epub ahead of print]

Ⅲ. 学会発表

- 1) 久保善子, 嶋野洋子, 久保智英, 島本さと子, 中谷淳子. どのような産業看護職の属性や状況が仕事の成果に結びついているのか? 第92回日本産業衛生学会. 名古屋, 5月.
- 2) 清水由美子, 嶋澤順子, 久保善子. 避難行動要支援

者対策の取り組みを通じた住民組織と多職種との協働。
第 78 回日本公衆衛生学会総会、高知、10 月。[日公
衛会抄集 2019：78 回：431]

V. その他

- 1) 嶋澤順子, 田中幸子, 北 素子. 【新カリキュラム
を見据えたカリキュラム評価・開発ガイドブック】
(Part 3-1) カリキュラム評価・開発の実際 全体へ
の取り組み ディプロマ・ポリシーを真に達成するカ
リキュラム構築の取り組み PDCA サイクルが循環
するカリキュラムのしくみを創る. 看護展望 2019；
44(9)：858-34.

在宅看護学

教授：北 素子 在宅看護学
講師：遠山 寛子 在宅看護学
講師：杉山 友理 在宅看護学

教育・研究概要

在宅看護学では学部教育として、2011 年度より、
在宅看護学概論から演習型授業での在宅看護援助論、
在宅看護学実習という一連の学習過程において、在
宅看護の特徴を踏まえた看護過程の展開能力修得に
重点をおいている。2019 年度は、その教育評価研
究を実施した。また、各教員の関心テーマに沿った
研究を進めた。

I. 在宅看護学実習における学生の患者情報の管理 の認識と行動

昨今インターネットや SNS の普及により、不特
定多数の情報の収集、発信が容易にできる環境と
なっており、学生が情報管理の認識を高め、適切な
情報管理を行うことができるよう教育的に関わる重
要性が高まっている。学生が在宅看護学実習におい
て情報管理の認識を高め、安全な情報管理を行うこ
とが出来るよう教育的関わりの示唆を得ることを目
的として研究に取り組んだ。

II. 急性期病院における認知症高齢者ケースの退院 支援プロセス構築の研究

近年、認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を
目的として急性期病院に入院する機会が増えている
が、その退院支援は困難ケースに挙げられる。認知
症特有の困難性に対応した退院支援モデルを開発す
るため、急性期病院の退院支援部門の看護師が関
わる認知症高齢者の退院支援プロセスを明らかにする

ことを目的として、複数ケーススタディ法を用いた
研究に取り組んでいる。

III. 看護学基礎教育における在宅看護学に関する講 義・演習・実習が在宅看護の視点構築に及ぼす 影響

地域包括ケアシステムの構築が進められ、入院治
療を終え在宅で療養生活を継続する対象への看護の
重要性が高まっている。本学では移行期の看護と訪
問看護の 2 つを軸として在宅看護学の講義・演習・
実習を展開している。基礎教育において学んだ在宅
看護の基本的な考え方が卒後臨床現場でどのように
実践に活かされているか臨床経験 1～5 年目の看護
師に対する調査を行い教育内容の示唆を得ることを
目的として研究に取り組んだ。

IV. 複数の訪問看護事業所を利用する小児の訪問看 護事業連携モデル開発

在宅で生活する医療的ケアを必要とする小児は増
加しており、合わせて小児の訪問看護の需要も増え
ている。しかしながら小児を対象とした訪問看護を
実施できる事業所と看護師は限られている現状にあ
る。訪問看護事業所は小規模が多いことから、小規
模訪問看護事業所が連携し合うことにより在宅で療
養する小児やその家族に対する支援体制強化が可能
となると考える。そこで、複数の訪問看護事業所を
利用する小児の訪問看護事業所モデル開発を行う研
究に取り組んだ。

「点検・評価」

在宅看護学では、一連の学習過程で積極的にアク
ティブラーニングを取り入れるとともに、ICT を
活用した教育に取り組んでいる。継続的に教育評価
を行い、その効果を確認しながら授業改善に取り組
んでいく必要がある。特に、2017 年度のカリキュ
ラム改正に伴う教育効果を検証しておくことが重要
である。2019 年度はその検証に取り組んだ。各教
員が取り組んでいる研究は、いずれも在宅看護学領
域では重要なテーマであり、領域内でサポートしあ
い、さらに発展的に取り組んでいくとともに、研究
成果を論文化し、広く公表していくことが課題であ
る。

研究業績

III. 学会発表

- 1) 石橋史子, 北 素子. 病棟看護師が受けている退院
支援に関する教育についての文献検討. 第 39 回日本

看護科学学会学術集会, 金沢, 11月. [日看科学会講集 2019: 39回: PC-16-04]

2) 遠山寛子, 杉山友理, 石橋史子, 北 素子. 看護学基礎教育における在宅看護学に関する講義・演習・実習が退院支援の視点構築に及ぼす影響. 第39回日本看護科学学会学術集会, 金沢, 11月. [日看科学会講集 2019: 39回: PC-16-02]

3) 北 素子. 質的看護研究における倫理. 日本看護研究学会第45回学術集会, 大阪, 8月. [日看研会誌 2019: 42(3): 369]

V. その他

1) 北 素子. はじめての質的研究 質的研究の基礎知識. 社医研 2020: 37(1): 80-6.

2) 嶋澤順子, 田中幸子, 北 素子. 【新カリキュラムを見据えたカリキュラム評価・開発ガイドブック】(Part 3-1) カリキュラム評価・開発の実際 全体への取り組み ディプロマ・ポリシーを真に達成するカリキュラム構築の取り組み PDCAサイクルが循環するカリキュラムのしくみを創る. 看展望 2019: 44(9): 828-34.